

高校教育と百貨店業務との関連

鱒 坂 二 夫
小 田 武
松 村 将

(1) ま え が き

昭和41年の春には、戦後のベビー・ブームのなかに生まれた高校生が大学の門に殺到する。大学進学難は幼稚園の予備校までつくり出すという笑えぬ現象を生じさせた。マス・コミも一斉にこの問題を書きたてている。高等学校はこの来るべき激しい進学競争に秘術をつくしてその成功を期している。進学問題は教育の分野ではもとよりのこと、政治・社会の分野でも脚光を浴びるものとなっている。

しかし、大学に進学するものがすべてではない。文部省編集の『わが国の教育水準』の資料によって高校卒業生の大学への進学率を算出してみると、昭和38年度で男子33%、女子17%となっている。残りの者すべてが職業生活についているとするのはとくに女子の場合問題であるが、少なくとも大学進学者よりは多数の人たちが就職していると推測される。ここに高校教育と職業生活との間に横たわる諸問題に対しても、当事者はもとより多数の人々が注意を払うことが要請されるわけである。

ところで、自己の将来の進むべき道についてある程度はっきりとした自覚をもち、それにふさわしい専門的技能の習得に励んでいる男子に比較して、女子の就職希望者に対する教育は特に多くの問題をはらんでいるように思われる。それは、つまるところ、よき職業人となるための技能を身につけるように努力せよということと、よき主婦となるための修養を積めというこの二つの両立しがたい要請に対処しなければならないということである。

この難問題の解決策の究明に各方面から努力がなされているが、ここで私たちは高校を卒業した女子の代表的な職場の一つである百貨店へ就職した人々の実態を調査することによって、現在の高校教育と就職指導とを一側面から検討することにしたいと思う。

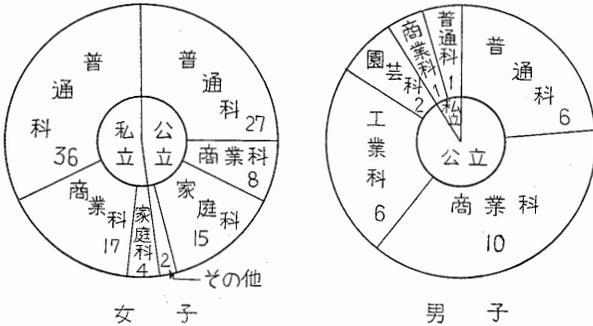
なお、この調査は京阪神地区のある百貨店を調査の対象としたものであるため、この調査の結果から就職指導の問題ひいては高校教育の当面している問題に対して何らかの解決策を急いで見出そうとするようなことは避けなければならないと思う。ただ、このような調査がさまざまな職場にわたってなされるならば、高校卒業後すぐに就職したこれらの人々の意見を高校教育改善のための一つの有力な手がかりとして採用できるようになるのではないかと考えられる。このささやかな調査が、その最終目標への到達のためのステップとなれば幸いである。

調査対象は、昭和39年度にこの百貨店に就職した人たちで、40年3月現在勤務をつづけている

京都大学教育学部紀要Ⅻ

女子109人、男子26人であった。女子109人の出身地内訳は、大阪・兵庫・京都が83人と圧倒的に多く、その他26人となっている。男子では、大阪・兵庫・京都の出身者21人、その他5人である。しかも、女子では70人、男子では18人と大半が自宅から通勤している。

つぎに、公立・私立の割合および課程別を图示すれば第1図のとおりである。これを見ても明



第1図

らかなように、女子にあっては普通課程修了者が63人と大半を占めているのに対して、男子の方は将来職場の技術管理および業務管理の中堅社員として働ける人材を得んとし、工業科および商業科の卒業生を多く採用していることが注目される。

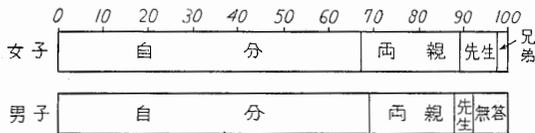
なお、この調査は女子に焦点をあわせているので、比較のため必要な時に

だけ男子の資料を参照することにした。

(2) 高校進学について

まず最初に、高校卒業後すぐに就職したこれらの人々が、どのような目標をもち、どのような選択基準をもって、高校へ進学しているかを調べてみた。

ここに興味深いのは、「高校を選ぶ場合誰が中心になりましたか」という質問に対して、第2



第2図

図のごとく、女子、男子とも、自分が中心になったと答えているものが60%以上にもなっていることである。自分の能力と将来の進路、高校が設けている各課程の特色と教科内容を各人が十分につかんでいるとす

れば、この傾向は生徒の自主性を尊重するという点からも好ましいと思われる。中学校での進学指導の際考慮すべき一つの重要な問題であると思う。

それでは高校を選択した基準は何によっているかを見ると、女子では、69人(63%)が、(i)高校をまず選び、コースはそのつぎに考えたと答え、(ii)自分の将来の進路を考えてコースをさきに決定し、その後そのコースのある高校を選んだと答えている人が34人(31%)と少ない。ところが、これに反し、男子においては、(i)と答えたもの14人(54%)、(ii)と答えたもの11人(42%)と、女子よりも(ii)と答えたものの割合が多くなっている。男子の方が将来の自分の進むべき道について、より真剣に考えていることをここから読みとることができよう。

さて第1表を見ると、この傾向は一層はっきりしてくると思う。

男子の方は選択の中心が自分であったと答えたものも、両親であったと答えたものも、将来の

鯨坂：高校教育と百貨店業務との関連

誰が中心になったか 何を基準にしたか	自 分		両 親 (兄弟を含む)	先 生
	自	分		
学校を先に選んだ	52		18	7
コースを先に選んだ	29		5	1

女 子

誰が中心になったか 何を基準にしたか	自 分		両 親	先 生
	自	分		
学校を先に選んだ	11		3	0
コースを先に選んだ	7		2	1

男 子

第 1 表

たものが、どのコースを実際選んだか、および、選んだコースが自分にとって結果として適していたかという点から分析してみると、第2表のようになる。これと比較するために、コースよりも学校を先に選んだとするものについて、同じ分析を試みると第3表のようになる。この表を比較検討して特に問題になるのは、第2表の女子の商業科と、第3表の女子の普通科・商業科および男子の商業科である。第4表にみるように、中学時代に高校を卒業すると就職しようと思っ

	女 子		男 子	
	適	不 適	適	不 適
普通科	12	1	1	0
商業科	8	3	7	0
家庭科	8	0	0	0
工業科	1	0	2	1
園芸科	0	0	0	0

第 2 表

	女 子		男 子	
	適	不 適	適	不 適
普通科	42	8	4	1
商業科	4	6	0	3
家庭科	8	0	0	0
工業科	0	0	3	0
園芸科	1	0	2	0

第 3 表

進路を考えてコースを先に選んでいるが、女子の方は選択の中心が自分であったとするものについては、学校を先に選んだとするもの52名に対して、コースを先に選んだとするもの29人と52人の1/2以上に達するが、両親が選択の中心となっている場合はコースを先に選んだとするものは少数である。普通科に生徒が押し寄せるわけである。

つぎに、コースを先に選択し

いたもののうちで、女子では48%、男子では62%が商業コースを選択していることを考えに入るとき、商業科を履修してみて、不適だったとする人が他のコースにくらべて非常に多いことは注目しなければならないと思う。商業コースは就職に適しているからと安易に考えて、自分の適性や能力をあまり考慮していないのがその一因と考えられる。

履修したコースが不適だったとしたものうち、具体的にその理由を書いているものをあげると、普通科では「進学するものを対象にしていたから。」と大学入試準備にかたよった高校教育を批判するもの、「就職のことを思って普通科を選んだが、何だか無駄だったような気がする。商業科にすべきだった。」という普通コースに対する認識不足によるものなどがある。商業科に関しては、「中学時代から高校を出る

	普通科		商業科		家庭科		工業科	
	女	男	女	男	女	男	女	男
中学時代	9	1	13	5	3	—	2	2
高校入学時	12	0	4	1	2	—	0	2
1年未まで	11	1	2	4	3	—	0	0
2年未まで	12	4	3	2	5	—	0	2
3年前半	12	0	2	0	4	—	0	2
3年後半	7	1	1	0	2	—	0	0

第4表 就職しようといつ決めたか

各々のコースのもつ特色、教科の内容、それに加えて各人の能力・適性を十分に考慮して選択がなされることが望まれるわけである。それは就職のためばかりでなく、高校生活そのものを有意義にするかしないかにも大きく影響するものであると考えられるからである。

なお、コースを先に選択したもののうち、そのコースをもつ学校が通学できる距離内にあったとするものは、女子32人中27人、男子11人中9人で、ほぼ満足できる値を示していると思う。しかし、はたしてこの数値が全国的に通用するかどうかは疑問であるといわなければなるまい。というのは、先に見たように、この百貨店に就職した人は大半が大阪・兵庫・京都出身者であり、比較的高校に恵まれていると考えられるからである。

(3) 高校の教科について

「高校での教科のうちで、現在の職業生活に役立っていると思う教科がありますか」という質問に対して、つぎのような回答を得た。

	普	商	家	計
珠 算	10	10	0	20
国 語	15	1	2	18
英 語 英 会 話	9	4	1	13
商 業	2	8	1	11
社 会	2	0	1	3
家 庭	1	0	2	3
数 学	2	0	1	3
書 道	8	1	1	10
理 科	0	0	1	1

第 5 表

とすぐに就職する予定だったため、先生が商業科をすすめるのに従ったが、自分は商業科に適しなかった」と反省するもの、「商業科でありながらあまりにも家庭科の科目が多かったとカリキュラムに対して不満を感じた私立高校の卒業生がいる。

いずれにせよ、単純に高校卒業と同時に実社会に出たいということだけから、コースを安易に選ぶのではなく、

この第5表によって明らかなように、各コースともそのコースの主要科目を構成しているものが、生徒によって役立ったとされているところからして、一応各コースとも本来の目的を達成しているといえると思う。

なかでも注目されるのは、英語が役に立ったとするものの多いことである。外人と接することの多いこの職場の性格がよくあらわれているといえよう。高校生が好きでない教科のトップ・グループに属するものとして英語をあげるのを考えあわせると興味深い。普通科コースはもちろん、他のコースにおいても英語が漸次重視

彦坂：高校教育と百貨店業務との関連

されてきていることは、それ故好ましい傾向であると思う。さらに一層の充実が望まれる。つぎに普通科卒業で珠算が役立ったというものが10人もいることも注目に値する。

	普	商	家	計
英語英会話	5	7	4	16
商業	3	1	3	7
家庭科	1	1	4	6
国語	2	1	1	4
社会	3	0	1	4
珠算	2	1	0	3
タイプ	0	2	1	3
道徳	2	1	0	3
書道	1	0	1	2

第 6 表

これに関連して、もっと時間数を増すなり、新しく設けるなりしてほしいものがあれば書いてほしいと求めたところ、第6表のような回答を得た。ただ、記入式にしたので回答者が少なかったのは残念である。

第5表において最高得票を得た珠算がここでは第6位となっている。積極的に時間数を増してほしいという程ではないようである。英語・英会話が16人と第1位になっている。なかでも、第5表とくらべて、商業科・家庭科の履修者の英語に対する希望が多いことに対しては、カリキュラム構成の上で英語の時間数を増すと

いう方向で考慮しなければならないと思われる。

逆にあまり役立つように思われないから、廃止するなり時間数を減ずるなりした方がよいと思っている教科はないであろうか。21人しかこれに答えていないのではあるが、その中で目立つのは、物理6、化学5、数学4で、他は生物2、古典・英文法・漢文・音楽がそれぞれ1あるだけである。調査の対象が女子であることを思えば、ある程度やむを得ない結果であろうが、しかし、この人たちにも親しまれるような物理・化学・数学にすることがそれらの教科を廃止したりするよりはよい解決の方法ではないかと思われる。というのも①英語・数学・理科・社会といった時間をできるだけへらして、職業に直接つながる専門の教科を充実したらよいというのが4人、②高校では職業科目の学習も必要であるが、広く教養を身につける上からも、英語・数学・

	① %		② %		③ %	
	女子	男子	女子	男子	女子	男子
普通科	7	0	86	57	7	43
商業科	0	9	73	91	27	0
家庭科	0	—	81	—	19	—
工業科	0	0	100	100	0	0
園芸科	0	0	100	100	0	0

第 7 表

理科・社会といった教科の一通りの学習はやるべきであるというのが79人と圧倒的に多く、③高校で習った職業科目はそのままでは実社会においてあまり役に立つようには思われないから、それよりも考える力や知識を広めるのに役立つ教科に力を入れる方がよいと思うという意見は13人となっているからである。

なお、この結果をコース別・男女別にあらわせば第7表のようになる。

(4) クラブ活動と生活指導

京都大学教育学部紀要Ⅻ

健全な趣味や豊かな教養をもち、余暇を活用する態度を育て、個性の伸長を助けるとともに、仲間と共通の関心を追求することによって協調性を育てるといったところの教育上教科学習では得られないすぐれた面をもつクラブ活動の実態と、その職業生活との関連をつぎに見ていくことにしたい。

クラブ活動を高校時代に行なったとするものは、普通科は63人のうち50人、商業科は25人のうち23人、家庭科は19人のうち15人、その他2人の全員となっており、クラブ活動をしたものの割合は主要3コースのうちでは商業科が最も高くなっている。

つぎに、これらのクラブ活動をした人たちはクラブ活動と勉学とを両立し得たであろうか。各コース別に表にあらわせばつぎのようになる。〔比較のため男子の資料もつけ加えておくことにする〕

	両立した			両立しなかった		
	運動ク	文化ク	計	運動ク	文化ク	計
普通科	10	26	36	8	3	11
商業科	6	10	16	4	1	5
家庭科	7	7	14	0	0	0
計	23	43	66	12	4	16

女子

	両立した			両立しなかった		
	運動ク	文化ク	計	運動ク	文化ク	計
普通科	2	1	3	3	0	3
商業科	2	4	6	3	0	3
工業科	3	1	4	0	2	2
計	7	6	13	6	2	8

男子

第8表

この第7表からわかるように、女子では男子ほどでもないが、運動クラブに参加していた人が「両立できなかった」と答えている。拘束される時間が文化クラブにくらべてどうしても多くなるので、勉学に力を入れることが困難になるからだと考えられる。もちろん、勉学と両立し得なかったことは好ましくないのにかわりはないのであって、クラブ活動に参加している生徒はむろんのこと、指導者もよく検討することが必要であろう。

しかし、このことだけから、運動クラブに参加することは好ましくないとするのはあやまりであるといわなければならない。というのも、運動クラブには文化クラブには見出せない肉体をきたえ、強い精神力を養い、生涯の友を得やすいといったすぐれた面があるからである。

「あなたの身の上に何か重大な問題が生じた場

合、一番さきに誰に相談に行こうと思いますか」という質問に対する回答を分析してみると、クラブ活動を行なった人、とくに運動クラブにいた人は真に話し合える友だちに、クラブ活動に参加していない人よりも多くめぐり会っていることがわかると思う。〔第3図参照のこと〕

第8表でもう一つ注目されるのは、家庭科コース履修者で、運動クラブであれ文化クラブであれ、参加した人は揃ってクラブ活動は勉学と両立したとしていることである。女子の選ぶ文化クラブは、家庭科の内容と関連深いものが多いこともその一因であろうが、しかし、これは運動ク

鯨坂：高校教育と百貨店業務との関連

ラブに対してはあてはまらない。両立したか、しなかったかはあくまでも主観的な判断によるものであるから、勉学に対する要求

水準の相違がこのような結果をうむ一因となっているであろうが、いずれにしても興味ある問題といえよう。

さて、女子にとって人気のあるクラブにはどのようなものがあるであろうか、主なものをここに挙げておきたい。数字は参加者数である。文化クラブでは、華道20、茶道6、コーラス6、美術5、書道4、珠算3、料理3となっている。運動クラブでは、バレーボール12、テニス9、卓球8、バスケットボール5、ソフトボール4、ダンス3となっている。

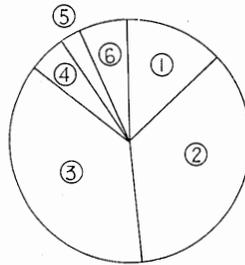
つぎに、クラブ活動に参加することによってどんな利益を得たと考えられているであろうか、コース別に図示すれば、第4図のようになる。

一般に、親友を得ることができたという意見と趣味を豊かにすることができたという意見が多いが、前者は第3図から考えたこととよく一致している。

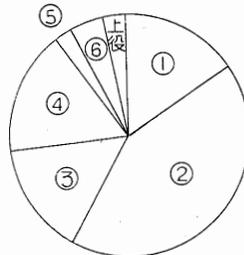
さらに、「会社でクラブ活動をしていますか」という質問に対して、13名がしていると答えているが、このうち12名までが高校在学時にクラブ活動をしていたものであり、しかもそのうちの8名は高校時代のクラブ活動と同じ内容のものをしてしていると答えている。職場において親しい友を得、また楽しく勤務にはげむためにも健全なレクリエーションが望ましいことはいうまでもないが、そのきっかけを大半の人々は高校時代にした経験のあるものに求めているというこの事実は、高校時代（広くは学校時代）のクラブ活動のもつ利点のもう一つの面を物語っているのではなからうか。

学校の生活指導とそれに対する生徒の反応はどうであろうか、「あなたの学校は服装、男女交際、言葉づかいなどについて、あなたがたにきびしかったと思いますか」と具体的にたずねてみた。〔第9表参照〕

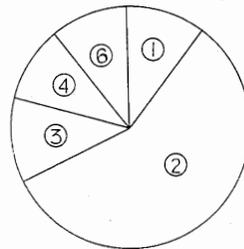
- ①:職場の仲間
- ②:両親
- ③:学校の友達
- ④:兄弟
- ⑤:その他
- ⑥:無答



運動クラブ参加者

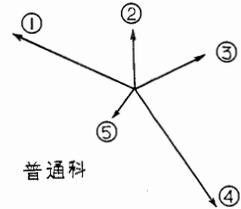


文化クラブ参加者

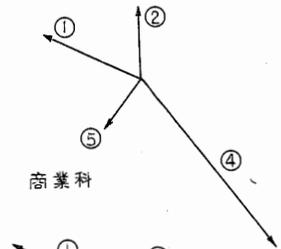


クラブ不参加者

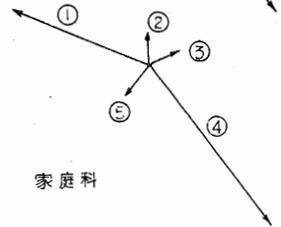
第3図



普通科



商業科



家庭科

- ① 親友を得た
- ② 親しい先生ができた
- ③ 社会的になった
- ④ 趣味を豊かにした
- ⑤ 職業生活に役立った

第4図

	普通科		商業科		家庭科		計
	ために なったならぬ	ために ならぬ	ために なったならぬ	ために ならぬ	ために なったならぬ	ために ならぬ	
非常にきびしかった	21	4	12	4	4	1	46
中間	30	3	6	2	13	1	55
自由にまかせていた	0	0	0	0	0	0	0

第 9 表

回答では、全般として学校側の態度がきびしいようであり、特に商業科でそれが目立っている。しかも、生徒たちはこのような学校側の態度に大多数肯定的な見解を示している。このような見解を在学当時からずっと

もちづづけてきているのか、あるいは、実社会に入ってから学校側のきびしい態度の意義を発見したからであるのかはこの調査ではわからないが、いずれにしても検討に値する問題であるといえよう。

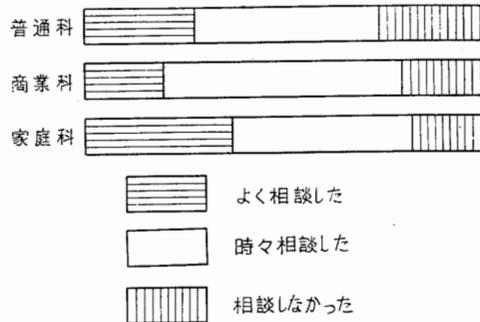
(5) 就 職

第 4 表によると、普通科・家庭科と商業科との差がはっきりとあらわれている。すなわち、過半数のものが就職しようとした時期を見てみると、普通科では高校 1 年の終り、家庭科では 2 年の中頃であるが、商業科では中学時代となっている。

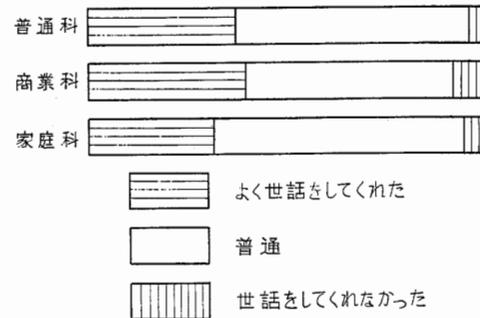
つぎに、「就職について主として相談にのってくれたのは誰ですか」という質問に対する結果については、コース別の特徴はほとんど出ておらず、やはり両親が一番多く総計で 55 人、高校の先生が 41 人でこれにつき、あとは友達 9 人、兄弟 5 人、親類 2 人となっている。しかし、41 人が就職の相談を主として高校の先生にもちかけていることは好ましい傾向といえよう。

これに関連して、就職の世話を主にして下さる専門の先生がいたかどうかを調べてみると、いなかったとするものは普通科で 6 人、家庭科で 2 人いるにすぎない。したがって、生徒たちが積極的に就職指導の先生に相談をもちかけ、また、これらの先生が親切に骨身を惜しまず指導に励むかということが肝要なこととなる。第 5 図は生徒がもちかけた相談の程度を、第 6 図は学校側の就職指導に対して、生徒たちがいかに感じているかを示している。

全般として好ましい傾向が出ているが、就職に関して一番関心の強いはずの商業科の人が(男子においても同じ傾向が出ている)相対的に



第 5 図



第 6 図

鯉坂：高校教育と百貨店業務との関連

相談に熱心でないのは興味深い。それに反して、学校側がよく世話をしてくれたと思っている人の一番少ない家庭科の人が一番積極的に相談しているのである。あまりに学校側が熱心に面倒をみると、生徒を受動的な態度にしやすいのであろう。自分の職業は自分で開拓するのだという意気込みをもたせるように就職指導にあたって配慮することが必要である。

つぎに、この百貨店を選んだ理由を調べてみると第10表のようになる。これによると、この職業が好きだからと答えているものが61人もいる。はなやかな百貨店の雰囲気にあこがれていたからであろうか。これについては後にさらに触れることにしたい。第2位に高校の先生に世話をしてもらったからというのがでてきているが、これは就職指導の結果があらわれたものと解せられる。

	普通科		商業科		家庭科	
	実数	百分率	実数	百分率	実数	百分率
この職業が好きだから	37	54%	14	50%	8	36%
先輩がいるから	6	9	2	7	2	9
高校の先生の世話	11	16	5	18	6	27
知人の紹介	9	13	3	11	3	14
その他	5	7	4	14	3	14
計	68		28		22	

第 10 表

角度を変えて、「自分がこの百貨店に就職できたのは自分のどのような長所が認められたと思っているか」と問うたところ、半数以上の59人がわからないと回答を保留している。回答延数53のうち、社交的な性格だからというのが26で、つぎに先輩がいるからが11となっている。容姿よくふるまいが人に好感を与えるからというのが7と少なく、クラブ活動で活躍したからが5、成績がよかったからが2、その他2となっている。社交的な性格がこの職場に適していると考えている人が多いのは当然であるが、後にみるように、この職場に満足しているものの割合が全体の58%であるのに対し、社交的な性格だから就職できたとするもののこの職場に対する満足の割合は71%と、その差が13%しかないことは、この職場に対する満足・不満足はそれ以外の種々の因子によっても強く影響を受けていることを示していると思う。この点については後にさらに検討することにした。

(6) 職業生活

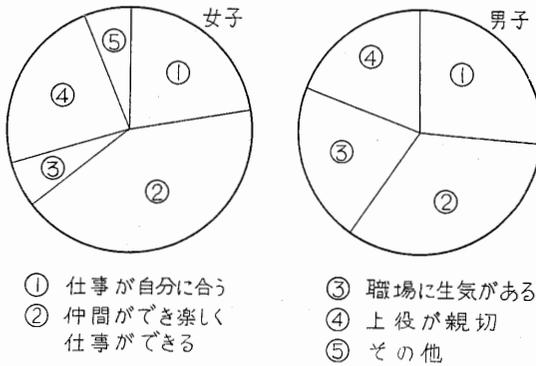
この百貨店に就職した人ははたして満足して勤務に励んでいるであろうか。その結果は第11表

	女子		男子	
	実数	百分率	実数	百分率
満足している	63	58%	21	81%
満足していない	39	36	5	19
無 答	7	6	0	0

第 11 表

に示したとおりである。

男子では女子に比して満足している割合がひじょうに高くなっていることが注目される。仕事の内容や職務に対する意気込みの相違がその主たる原因になっているのではないかと考えられる。



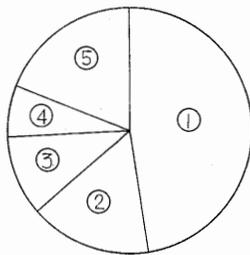
第 7 図

それでは、彼らはどのような理由で満足しないし不満足を感じているのであろうか。まず第一にここでの仕事に満足していると答えた人の意見を求めると、第7図のようになっている。なお、比較のために男子のもあげることにする。

男子にくらべて、女子は親しい友達を得るということが仕事が自分に合うより重要な要素になっており、また、職場に生气があるということをも満足の原因にあげている

ものが少ないことが目につく。しかし、男女いずれの場合にも、職場の人間関係がうまくいっているということが、仕事に満足を与える因子となっていることには変りはない。

それに対して、不満足だと答えた人はその理由としていかなるものをあげているのであろうか。第8図によると、仕事が自分に合わないというものが最も多く、人間関係がうまくいかないということがそれについている。



- ① 仕事が合わない
② 仲間関係がうまくいかぬ
③ 自分の創意工夫が生かせぬ
④ 上役とうまいかぬ
⑤ その他

第 8 図

さて、第10表においてすでに見たように、この職場に就職した理由として第1位を占めていたのが、この職業が好きだからというものであった。実際この人たちは好きな職場で楽しく仕事をしているのであろうか。61人中50人は満足して仕事をしているが、約6分の1にあたる11人は不満足だとして

つぎに、職場での満足の度合と、就職の際よく先生と相談したか、また、学校側が熱心に世話をしてくれたかということとの間に相関関係があるかどうかを考えてみたい。〔第12表参照〕

ここで問題になるのは、*印および**印をつけた項であって、*を1として計算すると、その和は、“満足している場合”は $1 \times 6 + 2 \times 1$ で8であるのに対し、人数のずっと少ない“満足していない場合”の方が $1 \times 6 + 2 \times 4$ で14と大きくなっている。このことから、就職に際して、生徒と学校が一体となって、調査・研究をして、各自の能力にあった職業につくことが望まれるわけである。

第三に、具体的な職場を記述していた72人について、職場の種類と、仕事に満足しているかないかとの関連を調べてみると、つぎのようになっている。〔第13表〕これによって明らかのように、全般に単純なくりかえしを要求されて自分が進んで創意工夫できる余地のほとんどない職場にいるものは不満足だとする割合が高く、商品の種類に富み、お客とのかなり突っ込んだ接触

鯨坂：高校教育と百貨店業務との関連

	よく相談した	時々	しななかった
よく世話をしてくれた	9	15	5
普通	7	8	* 6
あまりしてくれなかった	0	* 0	** 1

(a) 満足している場合

	よく相談した	時々	しななかった
よく世話をしてくれた	7	2	2
普通	4	11	* 5
あまりしてくれなかった	0	* 1	** 4

(b) 満足していない場合

第 12 表

職 種	満足	不満足	職 種	満足	不満足
サービス係	14	11	衣服・皮革品	4	2
事務	1	1	貴金属・工芸品・アクセサリー	4	0
食料品	1	1	化粧品	3	0
日用雑貨	9	6	玩具・文房具	8	1
室内装飾	0	2	煙草・慶弔用品・商品券	3	0
電 器	1	0			

第 13 表

	仕事に満足している		満足していない	
	人数	全員に対する割合 %	人数	全員に対する割合 %
商品に対する知識	35	56	24	62
お客に対する態度	26	41	22	56
話し方および関西弁	6	10	5	13
服 装	1	2	1	3
住 居	5	8	5	13
仲 間 関 係	2	3	15	38
交通ラッシュと都会の雑踏	8	13	7	18

第 14 表

の機会の多い職場にいるものは満足していると多く答えている。ある一つの職場でみっちり商品知識を身につけ、お客の好みを見ぬくといった一種の専門化と、従業員全体の立場からバランスをもった配置転換を行なうということとを両立させて、不満足感をできるだけ解消するように努めることが重要となる。

要するに、職場での満足度を高めるためには、就職に際して自分の性格や能力を正確に把握して、職業の表面的な姿に惑わされずに冷静に判断して選ぶようにすること、職場の配置に際して適材適所主義をとりながらも、各人の希望を聞き、それをできるだけ反映させていくこと、職場における人間関係を民主的なものにして互

いに腹臍なく語り合うことのできる明るい雰囲気にする、これらのことが特に重要である。この調査からいえる。つぎに観点を交えて、この百貨店に勤務して何に困ったかをたずねてみた。それを仕事に対する満足・不満足の見準によって整理してみると第14表のようになる。

仕事に満足していないと答えた人の方があらゆる項目において困った割合が高くなっているが、なかでも仲間関係については異常に高くなっている。このことから仲間関係がうまくいかないことが仕事に満足できない主たる原因になっていることがわかんと思う。

京都大学教育学部紀要Ⅻ

実社会に入って1か年、この人たちは自分たちの経験から何を学びとったであろうか。これを「後輩が実社会に入る心構えとしてあなたはあなたの経験からどんなことに注意したらよいと思いますか」と問うた。強く明朗な心をもて、協調し互いに他を信頼し合って立派な仲間関係をつくれ、言葉づかいに気をつけよ、自分に適した仕事を選べといったことをこの人たちは指摘しているが、これは今までに問題にしてきたことから当然であるといえよう。〔第15表参照〕

項目	回数	内容	回数	備考
すなおで明るい性格	10	礼儀正しくあれ	4	高校の教科と関連する事柄であるが、女性の教養とみなされているいわゆる習いごとといわれるものに、どれだけの人が関心を示し、また、実際にどのような習いごとをしているかを最後にとりあげた。
仲間関係に気をつけよ	10	慎重であれ	4	
忍耐と勇氣	9	積極さ	2	
言葉づかい	8	独立性	2	
協調心	5	信頼をえるようにせよ	2	
自分に適した仕事を選べ	4	健康に気をつけよ	1	
気持を大きくもて	4			

第 15 表

調査によると、現在習っていないし計画もしていないと答えたものは、わずか9人にすぎず、そのうち6人は時間的に余裕がないといっている。高校で習ったので十分だからと答えたのは家庭科卒業の1人にすぎず、あとの2人は習いごとに興味がないからと答えている。このことから、ほとんどの人が習いごとに強い関心を示し、それらをできるだけ多く身につけたいという希望をもっているということが理解されよう。

a) 何かを現在習っているとするもの

	普通科	商業科	家庭科
人数	23	14	5
コース全員に対する比率	37%	56%	26%

b) 具体的な内容

	普通科(23人)		商業科(14人)		家庭科(5人)	
	実数	百分率	実数	百分率	実数	百分率
華道	13	57%	8	57%	2	40%
茶道	6	26	4	29	1	20
洋裁	4	18	4	29	1	20
料理	3	13	0	0	1	20
編物	0	0	1	7	1	20
タイプ	2	9	0	0	0	0
和裁	0	0	2	14	0	0

第 16 表

大学にとりわけ女子短期大学に進学した人の主たる目的が、高校で基礎だけ学んだいわゆる習いごとを身につけようとするにおかれていると一般にいわれている。

高校で基礎だけでなく一応それらを自由にこなせる程度まで教えることが、高校のもつ使命および時間の制約によって現在のところほとんど不可能である以上は、これらの習いごとを身につけたいと熱望しているこれら就職者に対して何らかの対策をたてる必要があると思う。もちろん会社の中で講習会を開くことによってある程度解決できると思う。しかし、中小企業に働く人々の場合、それを期待する

鯉坂：高校教育と百貨店業務との関連

		普通科(43人)		商業科(14人)		家庭科(10人)	
		実数	百分率	実数	百分率	実数	百分率
洋	裁	26	60	10	71	2	20
料	理	20	47	9	64	4	40
華	道	14	33	4	29	3	30
和	裁	6	14	4	29	5	50
茶	道	8	19	3	21	3	30
編	物	2	5	2	14	5	50
書	道	4	9	0	0	0	0
自 動 車 運 転		2	5	1	7	0	0
琴		2	5	0	0	0	0

第17表 習いたいと希望するもの

ことはほとんど不可能である故一般に若い女性のための社会教育の充実が要請されるゆえんである。

なお、現在習っているもの、および将来習いたいと希望しているものをコース別に整理してみると、第16・17表となる。

勤務の余暇の習いごととなれば、どうしても時間的にはもちろん精神的・身体的にもあまり負担のかからないものが歓迎されるのは当然のことである。しかし、洋裁・和裁・料理といったものを習いたいという希望も、第17

表によってわかるように、強いのである。

したがって、先に触れたように、若い女性のための社会教育の充実はむろん必要であるが、それと並んで、高校での授業時間を実社会に出ると習得困難なこれら洋裁・和裁・料理に重点的に配分するとともに、これらを主たる内容としたクラブ活動を盛んにすることも一つの解決策になるのではないかと考えられる。

(7) 要 約

調査の結果を要約すると、つぎのような点を強調することができるであろう。

1. 男子にくらべて、女子は自分の能力、将来の進路、および高校に設けられている各課程のめざしている教育についての認識の程度が低いということが、高校を選択するに際して一つの問題となっている。

2. 高校の教科については、全般的に英語および珠算が職業生活に役立っているとするものが多い。それに反して、物理・化学・数学の現在のあり方に不満である人が少なくない。したがって、広い教養ある社会人を育成するという線に沿って、これらの科目の内容や指導法を再検討してみることが必要のように思われる。

3. 高校時代にクラブ活動をしたとするものが全体の83%と高い比率を示している。これらの人たちが高校時代はもちろんのこと、実社会に出ても好ましい傾向を示している事実を考えると、勉学と両立する範囲内でクラブ活動（とりわけ運動クラブ）に積極的に参加するように指導していくことが望ましい。

4. 生徒たちに依頼心をおこさせず、自分の職業は自分で開拓していくのだという意気込みをもたせるように、職業指導にあたって配慮すること、生徒の適性を充分に考慮することはもちろん

んであるが、それに加えて、選ぼうとする職業の実態について理解を深めるように指導することが必要である。

5. 習いごとをしたいという希望がひじょうに強い。これに応ずるために社会教育の充実はもとより必要であるが、希望しながらも就職後は習うことの困難なものを重点的に高校でとり上げる工夫をすることが望ましい。

(この研究は昭和38年度、39年度文部省科学研究費による機関研究「人材選抜の研究」の一部をなすものである)

調査用紙

高校教育と職業生活との関連についての調査

早いものでここに就職されてから一年になります。この一年間をふり返ってみると、さまざまなことが心に浮んでくると思います。さて、高等学校の教育と実社会での職業生活との関連について、みなさまがたの実態とご意見をお伺いして、今後の高等学校の教育を、より一層充実したものにしていこうための、参考にしたいと思っておりますので、どうかお考えのとおりご回答下さいますようお願い致します。

イ、ロとあるものにはあてはまる場所に○印をつけて④のように答え()のあるところには記入して下さい。

京都大学教育学部教育課程研究室

A

1 高校進学について

- ① あなたは(イ 男 ロ 女) ② 出身高校所在地(府 市 町) ③ 高校名()
- ④ (イ 共学 ロ 男子だけ ハ 女子だけ) ⑤ (イ 全日制 ロ 定時制) ⑥ 課程別(イ 普通科
ロ 商業科 ハ 家庭科 ニ その他())
- ⑦ 高校を選ぶ場合誰が中心になりましたか。
イ 自分 ロ 両親 ハ 先生 ニ 兄弟 ホ 親類 ヘ 友達 ト その他()
- ⑧ あなたが④の高校を選んだのはどの基準によりましたか。
イ まず高校を選び、コースはそのつぎに考えた
ロ 自分の将来の進路を考えてコースをさきに決定し、その後そのコースのある高校を選んだ
- ⑨ ⑧でロと答えた人はつぎの質問に答えて下さい。
自宅から容易に通学できる範囲内で自分の決めたコースをもつ高校がありましたか。
イ あった ロ なかったのでコースを変更して近くの学校を選んだ
ハ なかったのでやむを得ず通学の不便をしのいで遠方の学校を選んだ
- ⑩ 三年間学んだ結果からみて、あなたの選んだコースは自分に適していたと思えますか。
イ 適していた ロ 適していなかった、その理由は()

2 高校の教科について

- ① 高校での教科のうちで現在の職業生活に役立っていると思う教科がありますか。
()
- ② あまり役立つように思われないから時間数をへらすなり廃止する方がよいと思う教科があれば書いて下さい。
()

鯨坂：高校教育と百貨店業務との関連

- ③ 高校ではどのコースを選んでも時間の多少はあれ、英語、数学、理科、社会を必修しなければならないが、このことについてどう思いますか。
- イ 将来の自分の進路とは直接関係なさそうだから、出来るだけこのような科目をへらして、その時間を自分の将来にとって関係の深い教科や実習にあてた方がよいと思う
- ロ 高校では職業科目の学習も必要であるが、広く教養を身につける上からも上にあげたような教科の一通りの学習はやるべきであると思う
- ハ 高校で習った職業科目はそのままでは実社会においてあまり役に立つようには思われなから、それよりも考える力や知識を広めるのに役立つ教科に力を入れる方がよいと思う
- ④ 学校以外で何か習っていたものがあれば書いて下さい。()
- ⑤ 高校にある教科でもっと時間数を増して力を入れて学習したかった教科や自分たちが学ぶことのできなかった科目で実社会での経験から教えてもらったらよかったと思うものがあれば書いて下さい。()

3 高校生活全般について

- ① あなたは高校でクラブ活動をしましたか。 イ した ロ しなかった
- ② ①でイと答えた人はつぎの質問に答えて下さい。
- i) どんなクラブに入っていましたか。()
- ii) クラブ活動は勉強と両立しましたか。 イ 両立した ロ 両立しなかった
- iii) クラブ活動をしてどんなプラスがありましたか。あなたの場合にあってはまるものにはいくつでも○印をつけて下さい。
- イ 親しい友達が出来た ロ 自分のいろいろの問題について相談にのってもらえる親しい先生ができた
- ハ いろいろの人と接する機会が多く、はずかしがりがなおった
- ニ 趣味を豊かにすることができた ホ 職業生活に役に立っている
- ヘ その他()
- ③ ①でロと答えた人はクラブ活動をしなかった理由についてあなたの場合にあってはまるものにはいくつでも○印をつけて下さい。
- イ 勉強にクラブ活動のための時間を注ぎたいから ロ 家の都合で
- ハ 通学に時間がかかり時間の余裕がなかったから ニ 他の人が反対したため
- ホ その他()
- ④ あなたの学校は服装、男女交際、言葉づかいなどについて、あなたがたにきびしかったと思いますか。
- イ 非常にきびしかった ロ あまりきびしいものではなかったがはめをはずすときびしく注意した
- ハ 生徒の自由にまかせていた
- ⑤ 今から考えて④に関してあなたの学校のとった指導方法は自分たちのためになったと思いますか。
- イ 思う ロ 思わない

B

1 就職について

- ① あなたは高校を卒業したら就職しようといつ頃決めましたか。
- イ 中学時代 ロ 高校に入学した頃 ハ 高校一年の終りまでに ニ 高校二年 ホ 三年の前半
- ヘ 三年の後半
- ② あなたの就職について主として相談にのってくれたのは誰ですか。
- イ 高校の先生 ロ 中学の先生 ハ 両親 ニ 兄弟 ホ 親類 ヘ 友達
- ト その他()

京都大学教育学部紀要Ⅻ

- ③ あなたの学校では就職の世話を主にして下さる専門の先生がいましたか。
 イ いた □ いなかった
- ④ ③でイと答えた場合、あなたはその先生によく相談しましたか。
 イ よくした □ ときどきした ハ しなかった
- ⑤ あなたの高校はあなたの就職についてよく世話をしてくれたと思いますか。
 イ よく世話をしてくれた □ 普通 ハ あまり世話をしてくれなかった
- ⑥ あなたがここを選んだ理由についてあなたの場合にあてはまるものにはいくつでも○印をつけて下さい。
 イ この職業が好きだから □ 先輩がここにいるから
 ハ 先輩が他の同じ職業についていてその話を聞いたから
 ニ 高校の先生にこの職業について教えてもらったから
 ホ 高校の先生に世話をしてもらったから ヘ 知人に紹介してもらったから
 ト その他 ()

2 職業生活について

- ① あなたの現在の受持ちの職場は何ですか。具体的に書いて下さい。
 ()
- ② あなたがここに就職することができたのはあなたのどの点がすぐれているからだと思いますか。あなたの場合にあてはまるものにはいくつでも○印をつけて下さい。
 イ 高校の成績がよかったから □ 高校のクラブ活動で活躍したから
 ハ 容姿よくふるまいが人に好感を与えるから ニ 社交的な性格だから
 ホ 先輩がいるから ヘ その他 ()
- ③ ここに入ってすぐに受けた講習の中で特に印象に残っているものがあれば書いて下さい。
 ()
- ④ あなたはここでの仕事に満足していますか。
 イ 満足している □ 満足していない
- ⑤ ④でイと答えた人はその理由についてあなたの場合にあてはまるものにはいくつでも○印をつけて下さい。
 イ 仕事が面白く自分の個性にあっているから
 □ 仲間との親しみができ、楽しく仕事をすることができるから
 ハ みんなが仕事に打込み、職場が生気に満ちているから
 ニ 上役が親切に指導し、よく世話をして下さいから
 ホ その他 ()
- ⑥ ④で□と答えた人はその理由についてあなたの場合にあてはまるものにはいくつでも○印をつけて下さい。
 イ 仕事が自分にあわないから □ 仲間関係がうまくいかないから
 ハ 自分の創意工夫を生かすことがむづかしいから ニ 上役との関係がうまくいかないから
 ホ その他 ()
- ⑦ この職場に就職して困ったことは何ですか。あてはまるものにはいくつでも○印をつけて下さい。
 イ 商品に対する知識 □ お客に対する態度
 ハ 話し方および関西弁になれること ニ 服装について
 ホ 住居について ヘ 仲間について ト 交通ラッシュと都会の雑踏
 チ その他 ()

